



Title	<図書紹介>田中正明著『デザイン研究ノート』
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 210-211
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52907">https://doi.org/10.18910/52907</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

田中正明著

『デザイン研究ノート』

読書工房 2004年9月30日発行 B6判 344頁

藤田治彦／大阪大学

思えば一九六二（昭和三七）年、世界一周の切符を日本交通公社で買ったことから、この本の「アメリカのデザイン教育」だの、「欧米のデザイン教育を見て」などの話がはじまったのです。このように「あとがき」に記す著者の意匠学会会員、田中正明氏は、長年、女子美術大学他でデザイン教育に携わってこられたデザイナーでデザイン研究者、そして今となっては、戦後デザインの語り部の一人としても知られる。その著書『デザイン研究ノート』は、著者の研究ノートであると同時に、後進にとっての戦後デザイン史研究ノートにもなろう。先ず、同書の構成を紹介したい。

第一章 デザイン教育

一、デザインとは何か

二、デザイン教育

三、欧米のデザイン教育を見て

四、アメリカのデザイン教育(1)(2)(3)

五、シカゴ・ニュー・ Bauhaus から IIT  
まで

六、アメリカの大学におけるデザイン教育

(1) イリノイ工科大学デザイン学部

(2) アート・センター・カレッジ・オブ・  
デザイン

(3) クーパー・ユニオン、美術学部

第二章 ヴィジュアル・デザイン

一、日本のデザイン国際交流史——戦後の  
動向 ヴィジュアル・デザイン——

二、日本における広告デザインの歴史的研究  
(1) 終戦直後の雑誌による広告デザイン  
状況

(2) 一九四七年の雑誌広告について

三、新聞の読みやすさ、あるいは読みにく  
さ——デザインから見た新聞——

四、アメリカにおけるエディトリアル・デ  
ザインの展望

五、シカゴの印刷博物館

六、デザインの新傾向

七、デザインと紙——ポスターをめぐっ  
て——

このように、同書は「第一章 デザイン教育」と「第二章 ヴィジュアル・デザイン」の二つの章からなり、それは著者のアイデンティティ、つまり「デザイン教育者」であり「ヴィジュアル・デザインの専門家」であるということ、を明瞭に示している。著者のもう一つのアイデンティティを挙げるとするならば、それは「戦後日本の第一世代」とでも言うべきもののように思われる。たばこ「ラッキー・ストライク」と「米軍のジープの行進」の写真で始まる本書のページをめくりながら、バブル経済の日本で生れた若い世代は何を考えるのだろうか。

著者の田中正明氏にとって、「戦後」の意味は大きかった。それは、同書の「第二章 ヴィジュアル・デザイン」を読むと次第に感じられてくる。「第一章 デザイン教育」で繰り広げられているアメリカ各地の大学におけるデザイン教育の紹介と、第二章の内容とのあいだには、かなり大きな落差がある。第二章冒頭の「一、日本のデザイン国際交流史——戦後のヴィジュアル・デザイン——」では、1985年までのおもにグラフィック・デザ

インの流れが、国際交流を中心に、概説されているが、それに続く「二、日本における広告デザインの史的研究」は、1945年、1946年、1947年、つまり終戦直後の3年間に集中している。デザイン活動など行なわれていなかつたのではないかと思われるがちな3年間の研究である。

図版で紹介しているのは、粗末な紙に印刷された、その後の日本のデザインと較べるなら、素朴な雑誌広告等である。とくに1945年の広告に関しては、「売る」、「買ってもらう」というよりは、企業がその存在を、つまり「生きていることを」知らせる広告だった、という。しかし、企業も、広告图案家も、まったくの壊滅状態ではなかった。戦前と戦後はつながっているのである。1945から47年といえば、多分、著者田中氏の高等学校時代。著者はその後、東京藝術大学に入学して工芸科图案部に学ぶ。これらの章の基礎となった論文は、ある意味で、著者自身のルーツ探しのようなものだったのでないかと想像する。

もう一つ興味深いのはシカゴのダウンタウンにある、ベテラン印刷職人が運営している小さな印刷博物館へのこだわり、といってもよさそうな思い入れ溢れる記事である。そこに、イリノイ工科大学の佐藤啓一氏が登場するのも意外面白い。そう、著者にはもちろん、佐藤氏にも、アメリカにも、そういうところがある。さて、本書の序論となる「第一章、デザイン教育」の第一節「デザインとは何か」に戻ろう。

「現実的には、進駐軍要員やその家族のための住居、家具、台所用品などが、すべてアメリカのデザインそのままを指定されてメーカーに発注され、技術者やデザイナーはそれを追いかけるのに精一杯であったし、それらのデザインは一般にも浸透して、造形的な感覚に与えた影響計り知れないものとなったの

である。」一部地域を除けば、もうジープは走り回ってはいないし、アメリカが世界のデザインを断然リードしていると考えている専門家はそう多くはない。しかし、状況は大きく変わってはいないのかもしれない。

小さな美しい本である本書は、1963年から1991年までの約30年間に書かれた論文や記事を編集したものである。誰にも人に知らせておきたいこと、伝えておきたいことがある。著者、田中正明氏は、それについて明言していない。著者が伝えたかったメッセージは、まさに行間に読むか、あるいは、そこで紹介されている、終戦直後の雑誌類に掲載された素朴なイラストレーションとコピーのあいだに垣間見るべきものなのだろう。